敬語と性格表現

―源氏物語から―

岩瀬法雲

女三の宮が柏木の求愛に自主的でなかった一方、姉君の落葉宮は夕霧の求愛に極めて厳格であった。ところで夕霧の接近を警戒される宮の努力にも拘らず、男は到頭御簾の中に入ってしまう。しかし宮は逃げる袖を捕えられても、引きよせられても解かれることなく、遂に男を追っ払ってしまわれたのである。こういうことは、真相を知らない周囲の者にはとかく疑惑の的になる。その頃御病気の母御息所の加持に伺候していた僧が御息所に告げ口する所が夕霧の巻にある。先ず御息所の小康をお悦び申しあげて、

「大日如来そらごとし給はずば、などてか、斯くなにがしが心をいたして仕うまつる御修法に、しるしなきやうはあらむ。」

御息所との身分関係からしても当然「侍らむ」とありたい所である。

「この大将は、いつより此処には参り通ひ給ふぞ。」とお聞きして、「いであなかたは。なにがしに隠さるべき事にもあらず。今朝後夜にまうのぼりつるに、かの西の妻戸より、いとうるはしき男の出で給へるを、霧深くて、なにがしはえ見分い奉らざりつるを、この法師ばらなむ、大将殿の出で給ふなりけり。よべも御車もかへして泊り給ひけると、口々申しつる。げにいとかうばしき香の満ちて、頭痛きまでありつれば、げにさなりけりと思ひあはせ侍りぬる。」(夕霧)

圏点の箇所もそれぞれ「侍らず」「申し侍りつる」とありたい所で、現に最後は「思ひあはせ侍りぬる」といっているのでも分かる。

冷泉院の御出生の秘密を夜居の僧が院に申しあげる時、

「わが君はらまれおはしましたり時より、故宮(藤壺)の深く思しなげく事ありて、御祈り仕うまつらせ給ふ故なむ侍りし。委しくは法師の心にえさとり侍らず。事のたがひめありて、大臣(源氏)横ざまの罪にあたり給ひし時、いよ〳〵おぢ思しめして、重ねて御祈りども承り侍りしを、大臣も聞しめしてなむ、又更に事加へ仰せられて、御位に即きおはしましゝまで、仕うまつる事ども侍りし。その承りしやう」といって委しく申しあげるのであるが、すべてあるべき所には「侍り」がある。

或は、横川の僧都が嵐に浮舟を救い出した当夜の模様を語るのに、

「かしこに侍る尼ども(母尼や妹尼)の、長谷に願侍りて詣でて帰

りける道に、宇治の院といふ所にとゞまり侍りけるに、母の尼の労気にはかにおこりて、いたくわづらふ、と告げに、人のまうで来りしかば、まかり向ひたりしに、先づあやしきことなむ」と一段と声を落して、「親の死にかへるをばさしおきて、持てあつかひ歎きてなむ侍りし。この人（浮舟）も、亡くなり給へるさまながら、さすがに息は通ひておはしければ、昔物語に、魂殿に泣きたりけむ人のたとひを思ひ出でて、さやうなることにや、とめづらしがり侍りて。弟子ばらの中に験ある者どもを呼び寄せつゝ、かはりがはりに加持させなどなむし侍りける。」

ここにもあるべき所には必ず「侍り」がある。すると、御息所の御祈りの僧のことばづかいには本人の個性から来ているものを察知しなければならない。

作者はこの僧の性格を、「いと聖だちすくずくしき律師にて」と冒う。その仏道一筋の一本気な所を表現するために、殊更に乱暴な申しあげ方をさせるのであろうか。些かこの僧には横川の僧都などに見られぬ狂信者型の熱っぽさがある。御息所に小康をお悦び申しあげているかと思うと、突然、

「悪霊は執念きやうなれど、栄障にまつはれたるはかなきものなり。」というが、その「声はかれて怒り給ふ」とある。湖月抄に「正法をもて降伏すればやすきなり」とあるように罵倒しているのである。俗世のエチケットなどは念頭にない。従って「この大将は、いつより」とお聞きするにも、「ゆくりなく」と断ってある。そうして、「そよや、この大将は」と来るのである。細流抄に、「思ひどめなく、ふと出で給ふ也」とある通りである。こうした狂信者は物の考え方が一方的で、自分がこうと思ったら、相手の立場を考えようとはしない。「いつより此処には参り通ひ給ふぞ」と聞くから、御息所は「さる事も侍らず」とありのまゝに申していられることが耳に入らない。てっきり怪しいと疑っているから、「いであなかたは。なにがしに隠さるべきにもあらず」と申しあげるのである。細流抄の註が面白い。「法しの話のさま也」とある。この僧の態度を、細流抄の著者もやはり感じていたようである。

作者は、実は僧に告げ口をさせているのではないのである。この僧にはそんな俗気はない。狂信者らしく、非法をあばいて説法させるだけである。

「女人のあしき身を受け、長夜の闇に惑ふは、只かやうの罪によりなむ、さるいみじき報いをも受くるものなる。人（本妻）の御怒り出で来なば、ながきほだしとなりなむ。」

出発は誤っているが、私心のないことは明らかである。飽くまで女人のために正法を獅子吼しているつもりなのである。さて、そうあって、

「もはら承け引かず。」とあって、「頭を振りて、ただいひにいひはなてば」とある。相手のことも考えずに言いたいだけのことを言いまくる姿が見えるようである。河内本では、「もはら承け引かず」が二回繰り返したことになっている、そうであると、更に具体的である。

一体作者が人物の性格を表現する場合、一つの事件を設けてそれに対してどう反応するか、その反応の仕方を読者に観察させようとするものであるから、その人物の言語・態度・動作などはよい手懸かりとなるが、態度・動作は捕らえ易いに反して、言葉遣いの方はどうかす

ると逃がしがちになる。次の例は更に隠微である。

正妻女三宮が柏木に犯されたことを知って源氏は次第に宮から遠ざかるようになる。自らの過失に悩まされる宮には、それが二重の苦しみになる。そうした中に罪の子薫が誕生する。宮の苦悩は更に深くなる。宮は出家を決意される。しかし朱雀院（宮の父君）が始め宮を自分に託された御心中を思うと、源氏は内心はとにかく許すわけには行かない。産後の御回復がはかゞしくないことを心配される院は、入道の身を憚りながらも六条院に宮を御見舞になる。宮は、「生くべうも覚え侍らぬを、かくおはしましたるついでに、尼になさせ給ひてよ。」（柏木）と頼まれると、病気とはいえ死ぬとは限らぬ、年若いものが出家するのは、却って面倒が起こり、世の謗りを受けることもあろうからと、やはり思いとまりなさることをお勧めになるのだけれども、さすがに源氏にはちがう。

「かくなむ進みのたまふを、今は限りのさまらば、片時の程にも、その助けあるべきさまにてとなむ、思ひ給ふる」㈠

事情をご存じでない院の御不満が見える。日頃もそんなことを言われるのだが、それは物怪などが宮をだましてお勧めするのですと、源氏が申しあげると、

「物怪の教にても、それに負けぬとて、あしかるべき事ならばこそ慎らめ、弱りにたる人の、限りとてものし給はむことを、聞き過さむは、後の悔心苦しうや」㈡

源氏に対する御不信は深い。期待を裏切られたと思われる院には、源氏ばかりにまかせておけないというお気持がある。しかし、それを色にお出しになれない院は、

「さらば、かくものしたるについでに、忌むこ受け給はむをだに、結縁にはせむかし。」㈢

と、源氏を促がされる。この上は仏に託すより外なしというのが、「結縁にはせむかし」の意味である。

源氏は何かと宮の出家をためらっていたが、いよ〳〵夜も明け方になって、院のお帰りの時間も迫って来る。院はとう〳〵宮の御髪をそぎ捨てさせて受戒させなさる。お立ちに当って、

「世の中の今日か明日かに覚えはべりし程に、又知る人もなくて凝はむことの、あはれにさりがたう覚えはべりしかば、御本意にはあらざりけめど、かく聞えつけて、年頃は心やすく思ひ給へつるを、もしも生きとまり侍らば、さまことに変りて、人緊きすまひはつきなかるべきを、さるべき山里などにかけ離れたらむ有様も、又さすがに心細かるべくや。さまに従ひておぼし放つまじくなむ」㈣

と、源氏に挨拶をされる。「年頃は心やすく思ひ給へつるを」ここに深い休止があったに違いない。この「を」を境にして、長い過去が将来のことになっていくからである。

さて、院が源氏におおせられた㈠㈡㈢㈣を比較するに、宮に対して㈣だけには敬語がないのである。傍線の箇所はあってもよいところである。「校異源氏物語」でしらべてみても諸本一致している。何故だろう。㈠㈡㈢は宮の出家前である。わが御女ながらまだ源氏の奥方である。ところで㈣ではもはやそうではない。心理的には再びわが御女として取戻されたわけである。こうした御気持を、作者は表現しようとしたのではないだろうか。

元来、朱雀院は母君亡き三宮を他の皇女たちとはちがって特別に愛

されていた。そのことが院の出家に当っても唯一つの気懸りであった。その頃の或る日、東宮が院をお見舞になると、

「女宮達のあまた残りとゞまる行く先を思ひやるなむ、さらぬ別れにもほだしなりぬべかりける。……そのなかに、後見などあるは、さる方にも思ひ譲り侍り。三の宮なむいはけなき齢にて、只一人を頼もしきものとならひて、打捨ててむ後の世に、涙ひさすらへむこと、いとどうしろめたく悲しき侍り」（若菜上）と、御涙を拭いつゝ仰せられる。宮に対するこの特別な愛情から結局源氏に宮をお託しになるのであるが、しかし、宮の受戒後は源氏の前では再び宮に、敬語をお用いにならない所に、院の親としての深い苦悩が覗われる。作者はそれを表現しようとするのではなかろうか。「涙ひさすらへむこと」と、かって東宮に仰せられた時の感情が再び顔を出したために、「涙はむこと」㈣と、同じ語が、同じく敬語なしで表われたのであろう。そう言えば、最初、院が源氏に宮の将来をお託しになる時おおせられた「今日か明日かに覚え侍りつつ、さすがに程経ぬるを」が、再び㈣に表われているのも同じ理由からであろう。しかもその時中、院は「女御子たちをあまたうち捨て侍るなむ心苦しき。中にも、また思ひゆづる人なきをば、取り分きてうしろめたくみ煩ひ侍る」と仰せられて、「み挙り煩ひ侍る」とは仰せられていないことに注意すべきである。すべてわが御女としての扱いであることが分かる。

そう考えると、㈣に敬語のないのは元より作者の意図によるもので、それによって院の親としての苦悩、延いてはその御性格を表現しようとするものではなかろうか、と思うのである。

――一九五七・一一・二〇――

受贈雑誌目録（昭和三十二年四～十一月）

紀　要（青山学院女子短期大学）　第七輯
紀　要（大阪女子学園短期大学）　第一号
紀　要（大谷女子短期大学）　第二号
学　苑（昭和女子大学）　第二〇三号、第二〇四号
明治大学短期大学紀要　第一号
金城学院大学論集　第八集、第九輯
研　究（神戸大学文学会）　第一三号、第一四号
研究紀要（白百合短期大学）　第三輯
信愛紀要（和歌山信愛女子短期大学）　第一号
研究紀要（岐阜女子短期大学）　第六輯
奈良学芸大学紀要　第六巻第一号
女子大国文（京都女子大学国文学会）　第六、七号
龍谷史壇　第四二号
論　集（神戸女学院大学）　第四巻第一号
研究紀要（名古屋市立女子短期大学）　第六輯
研究紀要（華頂短期大学）　第一号
史　窗（京都女子大学史学会）　第一一号
論　攷（神戸女子短期大学）　第一〇号
人文論究（関西学院大学人文学会）　第八巻第一号、第八巻第二号
紀　要（共立女子大学）　第二輯
椋鳩文学　第九号
甲南大学文学会論集　第五号
研究論集（相愛女子短期大学）　第四巻第一号